街のオアシス再発見 第15回

湖を取り囲む　春採公園（釧路市）

森林インストラクター
小沢　信行（おざわ　のぶゆき）

十勝管内足寄町出身。1978年北海道新聞社に入社。記者として函館、釧路、小樽などで勤務。編集委員、論説委員などを務め2017年退職。日本森林インストラクター協会会員。道新文化センターで樹木観察の講師を務める。著書に「こうしてできた北の銅像」。

36ヘクタールもの広大な湖を擁するのが釧路市の春採公園です。春採湖一帯はかつて海でしたが、約３千年前に海面後退でできた砂浜が海水をせき止め、海跡湖となりました。海水と淡水が混ざり合う汽水湖です。

一周4.7キロの周遊路沿いには、小高い展望台や野鳥観察デッキ、ネイチャーセンターなどがあり、湖畔を散策しながら自然を楽しめるようになっています。

湖は金魚のような赤いフナ、ヒブナの生息地として国の天然記念物に指定されています。

夏を告げるノリウツギ

７月、春採湖に夏の訪れを告げるのがノリウツギです。ネイチャーセンター前では白い花があでやかに咲き誇ります。

湖が広がる春採公園

ノリウツギの「ノリ」は樹皮が和紙作りののりとして使われること、「ウツギ」は枝の髄を抜くと空洞になるので「空木（うつぎ）」と呼ばれることが語源です。

野山でよく見かける落葉低木で、道内ではサビタともいわれ、釧路に住んでいた作家、原田康子（はらだやすこ）さんの小説「サビタの記憶」にも登場します。

花はアジサイに似ており、花びらに見えるのはがくが発達した装飾花で、３～５枚のがくがあります。中央部に小さな花がたくさん円錐状に付きます。

白く咲き誇るノリウツギ

ノリウツギから生産したのりは、和紙をすくときに用いる植物性粘液となります。「サビタ糊（のり）」「北海糊」と呼ばれ明治以降、道内から和紙産地へ供給されましたが、エゾシカの食害などにより現在ではほとんど採れません。

そうした中、標津町では樹皮採取に2021年から取り組んでいます。収穫した年間200キロ以上の内皮は、奈良県吉野町の伝統和紙「宇陀紙（うだがみ）」作りに使われ、文化財の修復に役立っています。

周遊路にホザキシモツケ

ネイチャーセンター前でノリウツギの花を観賞し、周遊路を南へ進むと、道端に淡紅色の花が見えてきます。高さ１～２メートルで一見すると草のようですが、シモツケ属の落葉低木ホザキシモツケです。

シモツケは下野（しもつけ）の国（現栃木県）で見つかったのが名前の由来といわれています。本州以南に自生し、花は同じ淡紅色で半球状の集合体です。

これに対し、ホザキシモツケは花が枝先に円錐の穂状となって付くのが特徴です。北海道から本州にかけて山地の湿原に自生しています。

冷涼な気候を好み、地下茎を広げて増えるため、群生地のような景観になります。特に北海道ではよく見かけ、釧路地方では日当たりのいい郊外の道路脇などにも咲いています。

周遊路沿いに群生するホザキシモツケ

春採湖畔もホザキシモツケにとっては格好の繁殖地です。季節が春から夏に移り、花の少なくなった周遊路を彩る貴重な存在です。

実りが早いエゾニワトコ

ネイチャーセンターからバーベキューコーナーの方へ登ると、まだ７月だというのに、右手の林の中に赤い実がなっています。エゾニワトコは果実をつけるのが群を抜いて早い樹木です。

ニワトコは「宮に仕える木」という意味のミヤツコギが変化したといわれています。本州以南に分布する低木ですが、北海道に自生するエゾニワトコはニワトコよりも葉が大きく、葉裏の毛が多くなっています。春は淡黄白色の花を円錐状に咲かせます。

ニワトコの中国名は接骨木で、葉や茎を打撲の塗り薬にしたほか、骨折した部分を固定する副木として使ったことから名付けられました。

エゾニワトコの中には果実が黄色いものがあり、キミノエゾニワトコといわれています。

青森県の三内（さんない）丸山遺跡ではニワトコの実が多数出土しており、発酵させ果実酒にしたとみられています。

また、ニワトコは映画にもなったイギリスの小説「ハリー・ポッター」シリーズで、魔法の杖として使われています。遠い昔や海のかなたにも想像が膨らむ興味の尽きない樹木です。

赤い実を付けるエゾニワトコ

異彩を放つ毛綱建築

湖の東岸から見ると、対岸の丘の上に要塞のような重厚感のある建物が立っています。釧路出身の建築家毛綱毅曠（もづなきこう）さんが設計した釧路市立博物館です。

東洋古来の風水思想を重視する毛綱さんは、春採湖畔の丘陵を金の鳥が羽を広げ卵を抱いている形ととらえ、そのイメージを博物館の外観に表し、釧路市のシンボルであるタンチョウの姿に重ね合わせました。

ユニークなのは外観ばかりではありません。展示スペースは３層構造で２重らせん階段でつながっています。階段は天、人、地という空間と過去、現在、未来という時間をつなぐ「巡礼路」だとし、らせん階段を人類の遺伝子、ＤＮＡに見立てています。

1983年11月にオープンした博物館は、1985年の日本建築学会賞を受賞しました。そして、博物館の北西側にある母校、東中学校（現幣舞中学校）の改築にも携わります。

1986年に完成した校舎も斬新です。２列に並んだ一般教室棟と特別教室棟をつなぐ半径15㍍のアーチが７本設置されています。

春採湖に面した博物館と同じ区域を文化ゾーンとし、そのランドマークとするのが狙いです。また、見る場所により７本のアーチが表情を変えるという趣向も凝らされています。

アーチを用いて壮大な空間を生もうとした毛綱さんは「今必要なのは、建築の中だけじゃなく、都市に対して、環境に対してどういう空間を取り込んでいくか、あるいは提供してゆけるか」（「現代建築－空間と方法21」同朋舎出版）だと語っています。

鳥が羽を広げた形の釧路市立博物館

校舎をアーチがつなぐ幣舞中

毛綱さんが設計した釧路の建築物はこのほか、釧路市湿原展望台、釧路キャッスルホテル（現釧路センチュリーキャッスルホテル）、釧路フィッシャーマンズワーフなどがあります。

東京を拠点にしながら、故郷の街を彩ってきた毛綱さんは2001年、59歳の若さで亡くなりました。それから四半世紀たっても、湖畔のランドマークは異彩を放っています。

消えた石炭列車

釧路の経済を支えてきた石炭は、春採湖と深いかかわりがあります。湖周辺の地下には石炭層を含む砂岩層・泥岩層主体の「春採層」があります。湖の東端では石炭層が露出し、明治時代から採掘が行われていました。

この春採炭山で採れた石炭は、西端の沼尻まで小舟で運ばれ、そこから港までは馬車軌道で運搬されていました。冬季間は湖面が結氷するため、馬そりが活躍しました。

その後、採炭は地下へと進み、出炭量が増加したことから1925年、選炭場のある春採駅から貯炭場のある知人（しれと）駅まで、湖岸を走る釧路臨港鉄道が開通します。

さらに春採駅から北へ延び根室線の東釧路駅と接続、知人駅からは釧路川沿いの入舟町駅まで延伸しました。旅客輸送も行われ、1963年までは沿線住民の通学や買い物の足として使われます。

しかし、石炭産業の衰退に伴い2002年には太平洋炭砿が閉山。その後を釧路コールマインが引き継ぎますが、2019年には鉄道が廃止され、94年に及ぶ「石炭列車」の歴史に幕を閉じました。すでにレールも撤去され、当時の面影はほとんどありません。

釧路臨港鉄道の跡地

ツルは「来て舞ふ」か

ＪＲ釧路駅から釧路川に続く北大通に面した釧路信金本店前に野口雨情（のぐちうじょう）の詩碑があります。「駒は嘶（いなな）く釧路の平野　鶴も来て舞ふ春採湖」と刻まれています。

雨情が1940年、知人の住む釧路を訪れた際に書いた作品です。注目すべきは「鶴も来て舞ふ春採湖」です。タンチョウは江戸時代、北海道を中心に全国各地で生息していましたが、食用や愛玩用などとして捕獲され、1890年代には姿を消しました。

再発見されたのは1924年、釧路湿原の奥深い場所です。それから16年後、雨情は春採湖でタンチョウを見たのでしょうか。確認はできませんが、かつて春採湖とタンチョウが無縁ではなかったことをうかがわせるものがいくつかあります。

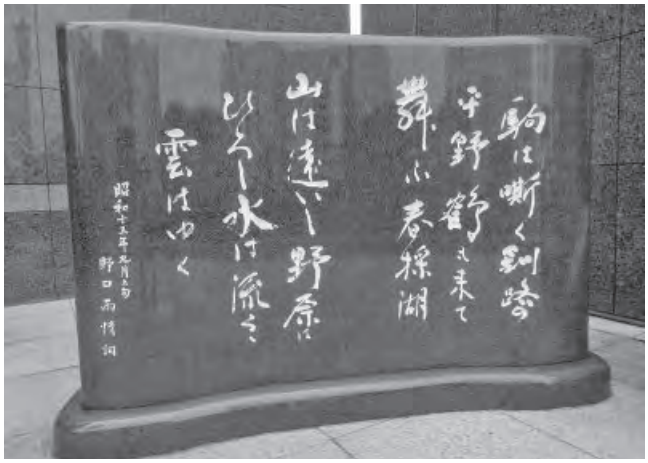
まずは湖周辺の地名です。「釧路郷土史考」（釧路市役所、1936年）によると、鶴ケ岱、千歳町、千代ノ浦の由来はいずれもタンチョウです。「千歳」「千代」はタンチョウが長寿だという中国の故事にちなんでいます。「湖水に丹頂の鶴を見ることある」「此辺時（このへんとき）に丹頂の鶴の飛翔を見る」とも書かれています。

1930年ごろには湖畔で「鶴の子饅頭（まんじゅう）」を製造販売する店が現れました。「明治大正から昭和初期には、あの美しい丹頂鶴の姿が春採湖においても見られたので、丹頂鶴とともにこの饅頭を釧路名物にしようと考えていたという」（釧路叢書第15巻「春採湖」、1974年）のです。

「春採湖の会30年記念誌」（1994年）に掲載された市民の寄稿には「時には、丹頂鶴も姿を見せた。あれからもう60年を数える」とあります。逆算すると、目撃したのは1934年ごろになります。

雨情が釧路を訪れたのは、それから数年後のことです。目撃しなかったにしても、住民の話をもとに「来て舞ふ」とうたったのでしょう。

タンチョウの数はその後の保護活動で増加し、生息域も道内各地に広がっています。湖は一時、水質悪化が懸念されましたが、下水道の整備などにより浄化が進んでいます。タンチョウが営巣しないまでも、再び羽を休める機会はあるかもしれません。



釧路をうたった野口雨情の詩碑